

2024

No. 912



11 November

みちしるべ

MICHISHIRUBE



Contents

娘を救ったエピペン／浜 幸寛.....	3
鏡と聖書／前田友樹.....	4
救いのかたち／T・E.....	7
著名人と聖書 第17回 シャーロット・ブロンテ／古賀敬太.....	12



☆当月号および過去1年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。 <https://e-michishirube.com>

娘を救った

エピペン

浜 幸寛



みなさんは、「エピペン」というキットをご存知でしょうか。これは、アナフィラキシーという重度のアレルギー反応を一時的に抑え、医療機関へ搬送されるまでの時間を稼ぐための注射薬です。

実は私の娘は、ピーナッツに対するアナフィラキシーの既往歴があり、医師からは常にエピペンを携帯するように指導を受けていました。しかしある時、娘はそのエピペンを携行せずに、誤ってピーナッツを食べてしまい、そのため、呼吸困難と全身浮腫で、生命の危機にさらされることになってしまいました。娘が倒れた場所は、人通りの多い歩行者天国の中で、当時、私は数キロ離れた所にいましたが、その知らせを受けた際、もしかしたら救急車が到着してよ間に合わないかもしれない、という不安が頭をよ

ぎりました。

それでも一刻も早く現場に急行し、到着するや否や、まzungったりとした娘の太ももにエピペンを注射しました。私としても、エピペンを使ったのはその時が初めてでした。ほどなくして到着した救急車に、酸素マスクをしながら苦悶する娘と乗り、救急救命センターに搬送され、治療が施され、その後、無事退院することができました。

こうしてエピペンは娘の命を救ったわけですが、娘にせよ、私にせよ、誰かがそれを持っていなければ、娘は助かりませんでした。私たちのいのちも同様ではないでしょうか。もし私たちが永遠のいのちを持つていなければ、肉体の死の先にあるのは、罪のさばき、すなわち永遠の滅びなのです。しかし、もし神の御子イエス・キリストを信じるなら、誰でもその永遠のいのちを持つことができるのです。

「御子(イエス)を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見るこゝとがなく、神の怒りがその上にとどまる。」

(三ハネの福音書3章36節)

鏡と聖書

前田友樹



私たちは毎日、必ずと言っていいほど鏡を見ているのではないのでしょうか。私たちの身の周りには色々な鏡があります。例えば、自動車には必ずバックミラーが付いています。見通しの悪い道路にはカーブミラーがあります。もし鏡が無かったら、安心して運転することが出来ません。

その鏡の歴史は大変古く、その始まりは水鏡だと考えられています。大昔の人たちは水面に自分の姿を映して見ていたようです。その後、石や金属を磨

いた物が用いられるようになり、さらに14世紀ごろから、現在でも使われているガラスを用いた物が作られることとなります。人間と鏡は大変長い付き合いだと言えます。

さらに鏡をもっと幅広く考えるなら、望遠鏡や顕微鏡、体の中を見る内視鏡なども、鏡の仲間だと言えます。そう考えると、直接見ることの出来ないものを何とかして見える様にするために、鏡は進化してきたと言えます。

しかし、この先だけだけ優れた鏡が作られたとしても見えないものがあります。それは、神様です。天地方物そして人間を創造された唯一の方が神様です。その神様のことがよく分かる様に、神様ご自身が用意されたものが、聖書という書物なのです。その聖書には、神様のことが詳しく記されており、聖書を読むときに、私たちは神様を正しく知ることが出来ます。

「神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることでできない方です。」(テモテへの手紙第一・6章15、16節※新改訳第2版)

他にも、私たちには見えないもの(見えていないもの)があります。それは、自分自身です。自分のことは自分が一番分かっていると思ってしまうかもしれませんが、私たちが創造された神様が一番よくご存知です。

聖書には、神様から見た私たち人間の本当の姿が、包み隠さずにはっきりと記されてあります。

「人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒しがたい。」(エレミヤ書17章9節)

これらのことから、聖書は「鏡」と言われることがあります。私たちの目では見えない神様を知るた

めに必要な鏡、本当の自分自身を知るために必要な鏡こそ、聖書であると言えます。

その聖書には、たくさんの方が書き記されており、読めばすぐに分かる箇所もあります。その反面、何度読んでも分からない難解な箇所もあり、続けて読む事をあきらめてしまうかもしれません。しかし、どうか少しづつでも聖書をお読みになることをお勧めします。

聖書から神様を正しく知り、自分自身の本当の姿を知ることによって、ある重大な事実を知らされます。それは、自分自身に救いが必要であるということです。

その救いを、神様は「イエス・キリスト」という方によって与えようとしておられるということです。

「聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」(テモテへの手紙3章15節)

ところで鏡は非常に便利なものですが、気を付けなければいけないこともあります。必ずしも、正確に映し出しているとは限らないことがあるからです。表面が歪んでしまえば、正しく映らなくなり、逆さまになれば、映ったものが伸びたり縮んだり、逆さまになったりします。

もしも、聖書のことばをそのまま素直に受け止めず、曲解してしまうなら、神様を正しく知ることは出来なくなってしまう。また、自分の都合の良いことだけを受け入れるとしたなら、自分自身の本当の姿を知ることが出来なくなってしまう。

ですから、聖書のことばが正しく語られる集まりに出席し、お話を聞かれることを心からお勧めします。あなたが真剣に救い求めるなら、神様は惜しまずその救いを与えてくださいます。

「聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではないことを、まず心得ておきなさい。預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」(ペテロの手紙第二・1章20、21節)



救いのかたち

T・E



この記事では、これからイエス様を信じ、従おうと考えている人を対象として、私のこれまでのささやかな経験をお話ししたいと思います。

クリスチャンの中には、人生のある時期に劇的な回心を経験して、神様の愛を知るようになった人たちがいます。それはとても幸いで貴重な経験だと思っています。

その一方で、そのような特別な経験はないけれど、単純に聖書に書かれていることを通して、イエス・キリストを心に信じるようになった人たちもいます。私は後者の方でして、これから書くことは、どうということもない内容であることを初

めに申し上げておきます。

私は、両親や祖父母、親戚がクリスチャンという家庭に生まれました。そういうわけですから、幼いときから聖書やクリスチャンの集まり（以下、単に集会といいます）に親しみながら育ったわけです。

両親は家庭では、聖書の話や同じ集会のクリスチャンたちの話をすることが多かったような印象があります。学校が夏休みや冬休みに入ると、母と兄弟たちとで祖父母の家に遊びに行きました。祖父は、聖書をこよなく愛する人でしたし、祖母は神様の愛を表すかのように優しい人でした。ま



た、私の両親が集っていた集会には、同い年の友だちがいたので、よく一緒に遊んでいました。

このような環境で生まれ育った子どもの私にとって、クリスチャンの生き方は、まっすぐでも良いもののように思えました。

高校生のときに、バプテスマ（洗礼）を受けて、クリスチャンになりました。これを書くのは恥ずかしいことですが、そのときは聖書の知識は

あまりなく、その聖書の話を疑うこともなく単純にそのまま受け入れていただけでした。もつと言うと、自分も身近にいたクリスチャンたちのような生き方をしたい、という思いが先行していたようにも思います。

ところが大学生になると、それまであまり強く意識しなかった罪の問題について、かえって悩まされることになりました。それは、救われたにもかかわらず罪の性質が弱まらない（!?）という葛藤です。

聖書の中で、パウロというクリスチャンが、このように書き記しているとおりです。

「私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願っていることはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです。

：私が自分でしたくないことをしているなら、それを行って居るのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪なのです。

：私のからだには異なる律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いを挑み、私を、からだに

ある罪の律法のうちにとりこにしているのが分かります。私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

（ローマ人への手紙7章15〜24節・抜粋）

この箇所を通して教えられるのは、立派なクリスチャンであっても、自分の中にある罪に苦しんで葛藤することがあるということです。イエス様を信じることによって、クリスチャンはすべての罪を赦されましたが、しかしそれは、自分の中にある罪の性質が自動的になくなってしまう、ということではありません。

私も自分自身の経験から、クリスチャンになっただけからといって、罪を犯さなくなるわけではないことがよく分かります。

しかし幸いなことに、そのすぐ後に、このようにも書かれています。

「こういうわけで、今や、キリスト・イエスに

ある者が罪に定められることは決してありません。」

（同8章1節）

イエス様は、十字架で死なれることで、私がいエス様のことを信じる前に犯してきた罪だけでなく、信じた後に犯すことになる罪まで含めて、すべての罪を身代わりに引き受けてくださいました。

ですからクリスチャンになった後、罪を犯したからといって、救いがなくなる、つまり罪の赦しが無効になるということは、決してありません。

さらに同じローマ人への手紙8章を時間をかけて読んでいたところ、次の一節に出会い、心がふっと軽くなったのを覚えています。

「だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていただくのです。」

（同34節）

たとえ私たちの罪を訴える者（たとえばサタンなど）がいたとしても、今は天国におられるイエス様が、いつも私たちのためにとりなしをしてくださいます。なんと心強いことでしょう。

クリスチャンになっても、罪の問題は、生涯つきまといてきます。積極的に罪を犯そうとするのではないにせよ、罪を犯すまいと決意しても失敗してしまうことは何度もあります。ですからクリスチャンというのは、「立派な人」ではなく、「赦された罪人」に過ぎません。

では、もしクリスチャンになった後に、罪を犯してしまつたら、どうしたらよいのでしょうか。そのときには神様に罪を告白して、悔い改めてください。

聖書の別の箇所にはこう書かれています。

「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」

もし自分には罪がないと言つたら、私たちは自分

自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

（ヨハネの手紙第一：一章7～9節）

悔い改めることは、救われるために一度だけするものではなく、クリスチャンになった後も、神様との幸いな関係を保つために、何度でも行うものなのです。

さて、冒頭のテーマに戻りますが、救いのかたちは人それぞれです。聖書にも劇的な救いを経験した人もいます。たとえばパウロは、そのような人物の一人です。（使徒の働き9章）

しかしイエス様は、このようにも言われました。

「神の国はこのような者（子ども）たちのものなのです。まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、

決してそこに入ることはできません。」

(マルコの福音書10章14、15節)

劇的な経験はないけれども、子どものように、素直にみことばを受け入れた、という静かな救いを経験した人も多くいます。

私の場合、素直に信じたものの、その後で壁にぶつかりました。しかし、そのことを通して、聖書をより深く味わい、必要なことを色々と教えられるという経験をすることができました。

ひとつ確かなのは、たとえどのような私たちの救いであっても、神様の前にはみな等しく尊いものだということです。百人いれば、百通りの救われ方があります。ですから、救われるときはこうでなければならぬと、自分で限定してしまう必要はありません。

救われ方にいろいろと違いはあれど、イエス様を救い主として、単に知識としてだけでなく、心から受け入れるということに関しては何の差異も

ないのです。それが本当に救われている、すべてのクリスチャンに共通することです。

とあるクリスチャンの、ささやかな経験に基づく話ですが、この拙文がこれからクリスチャンになろうと考えている方々の参考になれば幸いです。



著名人と聖書 (第17回)

古賀敬太

シャーロット・ブロンテ (1816—1855)

— 信仰の光に照らして見る「ジェイン・エア」 —



シャーロット・ブロンテは、1816年北アイルランドのソントンで、牧師パトリックと母マリアの三女として生まれます。妹には有名な『嵐が丘』を書いたエミリー・ブロンテがいますが、1847年には、姉シャーロットが書いた『ジェイン・エア』がまず脚光を浴びることとなります。

『ジェイン・エア』の主題は何か？

一般にこの小説は、女性でありつつも、権威に服従、依存するのではなく、主体的に生きていく自立した女性の記録として読まれてきました。しかし、小説の

主人公がブロンテと同様に、牧師の娘という構成をとっているだけではなく、実に多くの聖書からの引用があり、信仰に関する真剣な議論が展開されています。そこで今回、この作品のもう一つの主題である信仰の視点から、主人公ジェイン・エアの魂の軌跡を考えます。

親友ヘレンとの出会い

ジェインは、両親がなくなり孤児となり、ゲーツヘッドにあるリード叔母の家に預けられますが、そこで差別的な取り扱いを受けた上、ローウッドにあ

る孤児たちの寄宿学校に追放されます。ジェインはそこで心の友ヘレンと出会い、信仰の世界に目が開かれます。ヘレンは、ジェインの情熱的で、思つたらすぐ行動してしまふ性格を見抜いており、ジェインに大切なアドバイスをします。

「ジェイン！あなたは、人間の愛情を重く考えすぎよ。あなたつてずいぶん一途に思いつめる、激しい人ね。」

あなたの身体を造つて、そこに生命を吹き込んでくださった神様は、弱いあなた自身や、あなたと同じ弱い他の人々以外に、頼れるものをあなたにくださっているの。この世界や人間の他に、目に見えない世界、霊の世界があるのよ。」(本文・8章)

またジェインは、ヘレンから人を救ふことを学びます。ヘレンは、ジェインに「憎しみに打ち勝つ最上のものは、暴力ではないこと」を語り、憎んでいる人を愛することを語ります。このことは孤児としてさまざまな差別を受けてきたジェインにとつて、憎しみや復讐心から解放されるために重要なアドバイスでした。しかし、そのヘレンは結核にかかり、

その後あえなく亡くなつてしまいました。

ロチエスターとの恋愛

そして時は流れ、成長したジェインはソーンフィールドにあるロチエスター家に家庭教師として赴きます。ソーンフィールドとは、「いばらの荒野」という意味で、誘惑、試練の代名詞です。

その当主ロチエスターは、妻が発狂して、結婚生活が破綻し、絶望のあまり、諸外国を渡り歩いたり、多くの女性を情婦として、性的な遍歴を重ねていました。はたから見れば墮落した生き方ですが、彼は自分の運命を呪い、いつかは神の審判が下ることを恐れつつも、心の奥深くで自分を深く理解してくれる女性を求めていました。

ジェインは自分も孤児として苦難を経験していたこともあり、一見高慢で放蕩生活を送っているロチエスターの内面に潜む深淵を知るにつけ、彼に共感を抱き、彼を愛するようになります。

二人は、一時は結婚寸前まで行きますが、前述のようにロチエスターにはまだ生きてゐる妻がいまし

た。結婚式当日、そのことが発覚し、結婚は取りやめになります。それは、まさに神の介入以外の何物でもありませんでした。この時は、ジェインにとって最大の危機の瞬間でした。しかしジェインは「娘よ、誘惑から逃れなさい」という神の声を聞き、ロチエスターと別れます。

後に彼女ははこのことを回想し、「その頃の私は、神の作り給うた一人の人間を偶像のように崇め、神の姿を見ることができなかつた。」と述べています。

ロチエスターの悔い改め

その後ジェインは、一時的にムアハウスで牧師のセント・ジェインの家で生活しますが、夢でロチエスターが自分を呼んでいる声を聞き、彼のもとに帰る決断をします。それは危険な行動でしたが、その夢の背後に神の語りかけがありました。

その頃、ロチエスターは大きな苦悩を経験していました。彼の妻が自分の部屋に火をつけ、ロチエスターは、彼女を救出しようとはしますが、彼女は身を投げて、即死してしまいます。彼も屋敷が焼け落ち

て、その下敷きとなり、視力を失い、左手も切断せざるを得ませんでした。このことをロチエスターは、自分のしてきた罪に対する神の審判として受け止め、悔い改めに導かれます。『ジェイン・エア』の最も印象的シーンです。

ロチエスターは、再会したジェインに自分の悔い改めと新生を語ります。

「ジェイン、君は私を信仰のないやつだと考えているだろう。しかし、今私の胸は、この地上の慈悲深い神に対する感謝で一杯なのだ。神の見方は人間とは違い、はるかに明瞭にご覧になる。神の裁きは人間とは違い、はるかに賢明に裁かれる。

私は過ちを犯した。―かたくなな反抗心を燃え立たせた私は、天の配剤を呪わんばかりになり、神慮に従うどころか、それに挑戦した。神の正義は着々と進み、災いは相次いで私に降りかかり、私は死のかげの谷を通らねばならなかつた。神の懲罰はきびしかった。私は叩きのめされ、永遠に誇りを奪われってしまった。

君も知つての通り、私は自らの力を誇つていた。

だが、幼い子供が手を引いてもらうように、他人の手を借りねばならぬ今、その力が何になろう？

— ジェイン。私は自責と悔悟を味わい、創造主への服従を願い始めた。ごく短い祈りだが、心からの祈りであった。」(本文・37章)

この言葉の中に、変えられたロチェスターの姿があります。ロチェスターは試練を通して、神との出会いを経験しました。詩篇の記者がこう書いているとおりです。

「苦しみにあつたことは、私にとって幸せでした。それにより、私はあなたのおきてを学びました。」

(詩篇119篇71節)

ジェインとロチェスターの結婚

神はジェインに、神の前にへりくだり、新しい信仰の道を歩む、変えられたロチェスターとの結婚の道を準備されました。私たちは『ジェイン・エア』を読むと、ジェインの人生に対する神の導きと深い愛を覚えざるをえません。英文学者の奥村真紀氏は、「ジェインは、自分の人生全てを支配しているのは、

自身ではなく、神の手にあると信じている」と述べていますが、的確な指摘です。『ジェイン・エア』の中で描かれている聖書の神は、小説の世界だけでなく、実際に私たちの人生をも導かれる神です。

【参考】

○ シャーロット・ブロンテ

「ジェイン・エア」

(中央公論社、1994年)

○ 奥村真紀

「ジェイン・エアはどのような

物語であるのか」

(中岡洋・内田能嗣編、

世界思想社、2005年)



シャーロット・ブロンテ

みちしるべ11月号 第912号

令和6年11月1日(毎月1回1日)発行

発行所 伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町 2-8-9
TEL 042-366-7760
FAX 042-366-7790

編集人 伝道出版社 編集部
<https://dendoshuppan.shop-pro.jp/>
印刷所 株式会社 共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可

令和6年11月1日(毎月1回1日)発行

みちしるべ11月号 第912号

伝道出版社

〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9



定価1部50円+税
送料63円
振替00140927336

Column 

十字架の意味

十字架とは一体何でしょうか。教会の上につけられたり、様々なアクセサリーになっていますが、旧約聖書にはこのように記されています。

「木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。」

(申命記21章23節)

十字架はイエス・キリストが処刑された方法であることは有名です。イエス・キリストがかけられた十字架は、木でできていましたが「木につるされる(かけられる)」とは、聖書ではのろわれることを意味しています。

実は、私たちが生きているこの世界はのろわれています。のろいの証拠は、すべての生き物が必ず死ぬということです。人は死を当たり前のように思っていますが、これこそそのろいの結果なのです。この地上において死ほど恐ろしく、悲しいものはありません。

しかし、イエス・キリストは十字架に進んで行かれ、私たち人間の罪の身代わりとなって、のろいをその身に受けてくださいました。そして三日目によりがえられました。そのことを信じる者は、罪がもたらす死後のさばきを免れ、天国に入ることができるのです。

多くの人が老後の備えや、墓の準備に余念がありませんが、本当に大切な事柄はその先にあります。どうか、イエス・キリストの十字架に目を向けてください。

(坂本健一)

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。

